

承和二年六月廿九日○袖中抄、又見類聚國史。

〔萬葉集三〕挽歌過勝鹿真間娘子墓時山部宿禰赤人作歌一首并短歌、
古昔有家武人之倭文幡乃帶解替而廬屋立妻間爲家武勝牡鹿乃真間之手兒名之奧櫛乎此間
登波聞杼真木葉哉茂有良武松之根也遠久寸言耳毛名耳母吾者不所忘、

〔萬葉集略解三下〕廬屋立は翁○真賀茂はふせやたつとよみて枕詞とせりおもふに是は古訓の
まゝにふせやたてとよむべしふせやは集中に田ぶせともふせいほともよめりたては妻ど
ひせん料に廬を建るなり古しへつまどひするには先其廬をたてし事すさのをの尊のつま
ごみにやへがきつくるとよみ給へるをもおもへ宣長説も玄かり、

〔萬葉集五〕貧窮問答歌一首并短歌、

和久良婆爾比等々波安流乎比等奈美爾安禮母作乎○中布勢伊保能麻宜伊保乃内爾直土爾、
藁解敷而○下

〔萬葉集略解五〕ふせいほは卷十六かるうすは田廬のもとに云々の歌の註に田廬者多夫世と
ありふせやともいふ也まげいほは曲りよろぼひたるを云、
〔萬葉集十六〕有由縁井雜歌可流羽須波田廬乃毛等爾吾兄子者二布夫爾咲而立麻爲所見田廬者多
作也一本

右歌○中河村王宴居之時彈琴而卽先誦此歌以爲常行也、

〔袖中抄十九〕は、き木

そのはらやふせ屋におふるは、き木のありとはみれどあはぬ君かな○中

陽成天皇元慶四年云弘仁十三年國分寺尼法光爲救百姓濟度之難於越後國古志郡渡戸濱建
布施屋施墾田四十餘町渡船二隻令往還之人得其穩便○中